

戯曲「常長」（木下左太郎）

支倉常長が主君伊達政宗に命じられ、遣歐使節團を率ゐて渡歐、イスパニア王やローマ教皇に謁見し、受洗してカトリック教徒となり、數年後に歸國した頃、禁教令の發せられてゐた日本では切支丹への詮議が厳しく、常長も仙臺藩内の領地に蟄居ちつきよの身となつてゐたが、雪の降る或日、失意の常長の佗住わびずまに魚の籠を携へた簗笠姿みのがさの男が訪ねて來た。常長に隨從して使節團に加はり、受洗して熱心な信徒となり、今は世を憚はばかる佐藤太郎左衛門である。常長が病ひと聞いて、魚賣りに身を窶やつし見舞にやつて來たのだ。

太郎左衛門の來訪を常長は喜び、二人は歐州での思出話に花を咲かせる。常長は云ふ、イスパニア王の宮殿の莊麗、「御酒宴、御狂言の美しさ、きらびやかさ」に驚くにつけても、自分も歸國したら「奥州の御屋形をば、諸國の大名に比類ない主となさう」と日夜夢見たものだつたが、「世は移つて、ああ、わが夢も消えた」、「ひたすら功業を思ふ身」の我の今の佗しい暮しに「何の生甲斐があらうぞ」。太郎左衛門が、「難儀に逢ふ時は我を呼べ」との「貴い言葉を思ひ出せば、心がすがすがしく」なりませうと云つて慰めると、常長はローマ教皇に謁見した折の事に話を移して、かう語る、「佐藤氏今

は何を隠さう」、教皇の前に跪いて御足を吻ふ段になつて、わしは「この上もない迷惑な心になつた」、「異國の慣とはいひながら、常長、その口を以て人の靴を吻ふか」、渡歐したは「この忍辱の爲めであつたか」との聲が耳許に聞えたのだ。その時わしは「自分の心を偽らないでこの御足が吻へるか」と自らに問うた。あれを思ひ出すと「今でも五體がわなわなと打ち慄へる」。

太郎左衛門が青褪めて身を慄はせると、常長は云ふ、御足を吻つた後、激しい煩悶の末に、「わしは貳心を持つものぢや」と氣がついた。そして「日も夜も、貳心を持つひとの苦患に責められ續けた。この苦に比べれば閉門の咎もつらくはない」。「佐藤氏、御身は心底よりデウスを御信じ」あるが、「この身の思ふところは一代の名譽、御國への誠忠……」、「我等は互に別々の夢を見て」あつたのだ。太郎左衛門は悲しい面持で去つて行く。常長は遠からずして世を去つた。

本太郎の切支丹關聯作品の根底には、戰國末年から寛永迄に西洋文化に接した日本人の、「異質文化と思想宗教を受容消化するあり方と、その挫折を得心のゆくまで眺めてみた」といふ願ひがあつたと杉山二郎が書いてゐる。無論、戰國武士支倉常長の西洋文化への思ひと、留學經驗も豊富で東京帝大醫學部教授となり海外でも高く評價された一流の醫學者木下本太郎のそれとの間に何の違ひも無い筈は無いが、それにも拘らず、「自分の心を偽らないで」己れと向合ふ時、作品の最後に登場する「旅人」（實は本太郎自身）が常長について語る様に、「あの人の夢、あの人の幻、そしてまたあの人の

惱^{なやみかたじみ}、悲^{かなしみ}も、自分のもののやうに、はつきりと思ひ浮べ」られると柰太郎は告白せざるを得ない。短詩「七つ森」に於て彼は常長にかう語らせてゐる、「八年苦心の羅馬^{ローマ}、語ること一つもなし。無きに非^{あら}ず、分らなんだ」。要するに、日本人たる己れには決定的に「分らな」い何かが西洋にはある、といふのだ。それ故「苦心」して西洋を理解しようと努めれば努める程、「貳心を持つひとの苦患に責め」られざるを得ない。死去の一年半前、昭和十八年十二月三十一日の日記に柰太郎はかう記した、「つくづく反省すると」、西洋醫學は「僕にとつては附^{つけ}焼^{やき}刃^ばである」。「貳心」の分裂と無縁の露伴に感歎せざるを得なかつた所以であらう。(木下柰太郎全集第四卷、岩波書店)